

1、5の——線の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

- 1 サイゲンのない欲望。
- 2 カイテイの地形を調査する。
- 3 天気図のトウアツ線。
- 4 ユウリヨウ物件を探す。
- 5 新たなリヨウイキへの期待。
- ア サイバン所を見学する。
イ 借金をヘンサイする。
ウ 夏の虫をサイシユウする。
エ コクサイ情勢を探る。
ア テイキアツが発生する。
イ コンテイに流れる思想。
エ 報告書をテイシユツする。
ア 日本テイエンを散策する。
イ 富士山の初トウチヨウ。
エ キユウトウ設備を整える。
ウ 男女ビヨウドウの実現。
ア トウイツの取れた行動。
イ ハイユウを指す。
エ ユウエン地に出かける。
ア ユウビン物が届く。
イ エプユウ伝を読む。
ウ 球場の使用リヨウ金。
ア リヨウシンがとがめる。
イ リヨウド問題を考える。
エ すぐれたギリヨウの持ち主。

中学一年の「マチ」は科学部に入りました。ある日、「マチ」が図書館で本を借りると、そこには誰かのメッセージがあり、「マチ」がそれに答えて紙をはさんだことから、嬉しい時やつらい時にその気持ちを書くという、手紙のやり取りが続いていました。同じクラスには陸上部で学級委員の「みなみ」、バスケットボール部の「琴穂」という、仲のいい友達がいます。入学当初、マチに親切にしてくれた「高坂紙音」が学校を休みがちとなったため、「マチ」たちは帰りがけに「紙音」の家に寄るようになりました。

文化祭の合唱練習の間も、みなみとマチは紙音の家を何度も訪ねた。しかし、応対に出てくるのは最初の日と同じように、いつでも紙音のお母さんだけだった。

一学期の最初、マチの制服のしつけ糸を切ってくれたあの子は、今、一人きりの部屋で過ごしているのかもしれない。そう考えると、胸の奥がきゅつとなる。

「私、一人で行こうか」

マチが言うと、みなみがびっくりしたように「え」と呟いた。

「高坂さんの家なら、何度もみなみちゃんと一緒に行ったら、私一人でも大丈夫だよ。みなみちゃん、新人戦の準備で忙しそうだし、明日も朝練があつて早いんでしょ？」

「そうだけど、マチを一人で行かせるのは悪いよ。遠回りになるし」
みなみが断りかけたとき、思いがけず、背後から「私、行くよ」という声がした。振り返って、驚く。

琴穂だった。

マチとみなみは思わず顔を見合わせる。そんな二人に向け、琴穂がさらに続けた。

「私がマチと一緒に行く。今日はバスケット部、陸上部ほど遅くならないと思うから、ちょっと待っていてくれれば大丈夫だよ。私にまかせて、みなみは部活に行つて」

「助かるけど、でも」

みなみの声を遮るように、琴穂がすばやく首を振り動かしした。

「みなみってさ、しっかりしてるのはいんだけど、一人でたくさん
のことを抱えこんでがんばりすぎるんだよね。そんなんじゃ、いつか
参っちゃうよ。——今年の新人戦、陸上部の他の子に聞いたけど選手
になれそうなんでしょ？」

みなみの顔にはっとした表情が浮かぶ。琴穂がふう、と小さなため息をついた後で笑った。

「だったら、今はそっちががんばり時だよ。もっと頼つてよ。——こ
れまで副委員長なのに全然頼りにならなかったのは、私が悪かったか
らさ」

言いながら、琴穂がマチを見た。「マチに仕事、だいぶ頼っちゃつてたし」と決まり悪そうに告げる。

「マチも、これまで、いろいろごめんね。私、部活を言い訳にしすぎてた。そんなこと言い出せば、みなみだって陸上部が大変なのに、委

員の仕事したり、高坂さんの家、行ったりしてたんだもんね」

謝った後で照れくさそうに目を伏せた琴穂の前に、みなみがとまどうような表情を浮かべる。ややあつてから、おすおすと「いいの？」と琴穂を見た。

「頼んでも、平気？」

「うん」

琴穂が胸を張って頷いた。

一連のやりとりを驚きながら見ていたマチの頬がゆるんでいく。「ありがとう」とためらいがちにお礼を言うみなみを、とてもいいと思つた。

いつもしっかりしているみなみが自分たちを頼ってくれたことが、嬉しくなる。

琴穂と二人で紙音の家に向かう途中、マチは改めて琴穂に礼を言った。

「さつきはありがとう。みなみちゃん、嬉しかったと思う」

横を歩いてきた琴穂が、「だって」と笑う。

「みなみ、完璧すぎるんだもん。あれ、本人何でもないふうになつて
るけど、結構大変なはずだよ」

「私も実はちょっとそう思ったことがあつたけど、言い出せなかったんだ。琴穂が言ってくれてよかった」

「うーん。みなみ、たぶん、自分が無理してることに気づいてないんじやないかなあ。自分のことって、かえってなかなか気がつけないよね。私もそうだったし」

琴穂が「ごめんね」と頭をかく。

「私も合唱の練習、リーダーなのにちゃんとやってなかった。マチに注意されてはつとしたの」

「私こそ、あのときはキツイこと言っちゃってごめん」

あわてて謝ると、琴穂が「そう？」と首を傾げた。

「全然キツくなかったよ。むしろ普段おとなしいマチから言われるなんて、私、よっぽどだったんだなって反省した。——なんか、ありがとね。陰でこそそ言うんじゃないって、面と向かって言ってくれたから、かえって気分よかったよ」

「そんな……」

頬がかあつと熱くなった。

——はつきり自分の意見が言えない性格を直したい。

今年の四月、マチが中学校に入学するにあたって目標にしたことだ。

その一歩が踏み出せたように胸の奥がじん、とあたたくくなる。

琴穂から本音の声を聞いたように思えたら、マチもまた、その本音にこたえなくなる。自分のことについて話してみたくなくなった。

「私ね、いい子^ことか、真面目^{まじめ}って言われるの、少し嫌なんだ」

今も、琴穂から「普段おとなしいマチ」と言われたばかりだ。おとなしい、優しい、いい子。褒め言葉なのに、マチを息苦しくさせる言葉たち。琴穂がびくりしたようにマチを見た。

「どうして？」

「自分の意見がはつきり言えない子^ことか、面白くない、楽しくない子^こなんだって周りから思われているようで、心配で」

話しながら、だんだんと胸のつかえが取れていく。絶対に人には話

せないと思っていたことだったのに、言葉に羽が生えたようだった。

琴穂は相変わず驚いていたが、聞き終えて大きく息を吐き出した。

「ごめんね、私、マチのことたくさんいい子^こって言った。褒め言葉のつもりだったんだけど無神経だったね」

「ううん。私が気にしすぎるのも確かだから」

「勉強できる子は、悩みなんかないと思ってた。私、マチのこと羨ましかったんだ」

「ええっ？ 私こそ、琴穂は運動神経もいいし、友達も多いから悩みなんかないと思ってた」

お互いに驚いたものの、いつの間にか、一緒に笑っていた。

「本当は私、陸上部に入りたかったんだ」

マチはさらに思いきって言ってみた。

「今は科学部が楽しいし、入ったことは後悔してない。だけど、四月の私は勇気がなくて……」

あのときは、琴穂に言われたことを気にしていたのだ。陸上部は練習が厳しいし、先輩たちもみんな怖いからやめた方がいい——、当の琴穂は四月に自分が言ったことを覚えてもないだろう。だけど、その言葉がマチの気持ちに歯止めをかけた。

案の定、「ふうん」と他人事^{ひとこと}のように頷いた琴穂が、しかし次の瞬間、意外なことを言った。

「陸上部かあ。確かにマチ、小学校の頃から長距離得意だったもんね」「え？」

「マラソン大会や体育の時間に見てた。私は最初に勢いよく飛ばして後半バテるのに、マチは根気強いっていうか、ペースに乱れが全然な

いんだよね。最初から最後まで自分のペースを守る。すごいなあって思ってたんだ」

すぐに言葉が返せなかった。胸に、ある一文が蘇^{よみがえ}る。図書室で、

見えない誰かが残した手紙。

「がんばってれば、見てくれるかな。」
見てくれるよ。

胸の中で、呼びかけていた。見てくれる人は、必ず、どこかにいる。手をぎゅつと握り締め、琴穂に向けて「ありがとう」とこたえた。

(辻村深月「サクラ咲く」(光文社)より)

※1 しつけ糸…縫い目を正しくするために仮に縫い付けてある糸。

問一 ——線1「胸の奥がぎゅつとなる」とありますが、この時の「マチ」はどのような気持ちであつたと読み取れますか。わかりやすく説明しなさい。

問二 ——線2「マチとみなみは思わず顔を見合わせる」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 部活で忙しいと言っていた「琴穂」が、わざわざ「紙音」の家に行くことと申し出てきたことを意外に思ったから。
イ 「紙音」と親しいわけでもない「琴穂」が、「紙音」の家に行くとは信じられなかったから。

ウ 「紙音」の家に行くことに反対していた「琴穂」が今日になって突然一緒に行くと言ったことに驚いたから。

エ 自分たちの呼びかけに応じて、「琴穂」がようやく「紙音」の家に行く気になったのを嬉しく思ったから。

問三

——線3「琴穂がふうんと小さなため息をついた後で笑った」とありますが、この時の「琴穂」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「みなみ」が自分の話を理解してくれないことにいらだつとともに、これ以上は口をききたくないと思っている。

イ 行くと行ってしまったことを後悔したもの、自分が言ったからには必ず行かなければならないと思っている。

ウ 自分ががんばりすぎることに基づいていない「みなみ」に対し、理解を示すとともに応援しようと思っている。

エ 「みなみ」にばかり負担をかけたくないと思いつつも、自分らしくないことを言ったと恥ずかしく思っている。

問四

——線4「みなみがとまどうような表情を浮かべる」とありますが、この時の「みなみ」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日ごろの「琴穂」の言動から、この言葉の裏にも何か意味があるように思えて、真意を問いただそうと思っている。

イ 「マチ」と合唱の練習でいさかいがあつた「琴穂」を、「紙音」の家に行かせることについて不安に思っている。

ウ 「紙音」の家に行ったことのない「琴穂」を自分の代わりに行かせるのは無責任に思え、自分が行くべきだと思っている。

エ 「琴穂」の申し出を受け入れて「紙音」の家を訪ねるのは彼女に任せるか、学級委員として自分が行くべきかで迷っている。

問五

——線5「マチの頬がゆるんでいく」とありますが、この時の「マチ」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア「紙音」を心配しているのは自分だけかと思っていたが、「みなみ」と「琴穂」の会話を通じ、二人も心配してくれていると知って安心している。
- イ運動部に所属する「みなみ」と「琴穂」の率直なやり取りを聞いて、自分も二人のように思ったことを言えるようになるかと思っている。
- ウお互いに相手の立場を考えた、「みなみ」と「琴穂」の会話を通じて、自分たちのつながりがより一層強まってくことを実感している。
- エ不満を持ちつつも、相手の立場を尊重しようとしている「みなみ」と「琴穂」に感心すると同時に、自分も大人になるかと思っている。

問六

——線6「手をぎゅぐゅこたえた」とありますが、この時の「マチ」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア「琴穂」が自分の忠告を真正面から受け止めて、「みなみ」や「紙音」にも気を配ることのできるまでに成長してくれたことを喜んでいいる。
- イ「紙音」の家に何度も足を運んでいる「みなみ」や「マチ」の気持ちを「琴穂」がくみ取って、自ら一緒に行動するようになったことに感動している。
- ウいい子といわれることに抵抗を感じていた気持ちを以前から理解してくれていただけでなく、陸上の能力をも評価してくれた「琴穂」をありがたく感じている。

エ Xは今まで自己中心的な都合で周りに迷惑をかけながらそれに気がつかなかったことへの謝罪の気持ちである。Yには自分の仕事をしっかり果たしていないことを指摘して反省のきっかけを与えてくれたことに対する感謝の気持ちが含まれている。Zには合唱の練習でのいさかいから、「マチ」に対して素直になれなかったことに対する反省の気持ちが込められている。

問八

本文の表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア「振り返って驚く」「決まり悪そうに告げる」など現在形の表現が織り込まれることで、お互いのことを大切に思うあまり、しかたなく相手に合わせざるを得ない中学生の心の動きが臨場感を伴って描き出されている。
- イ「明日も朝練があつて早いんでしょ」「合唱の練習、リーダーなのに」など中学生らしい会話を軸にテンポよく話が展開するが、その中にお互いを思いやる気持ちが込められており、三者三様の心の成長が描かれている。
- ウ「照れくさそうに目を伏せた琴穂」「琴穂がびっくりしたようにマチを見た」など中学生の世界に大人の視点を入れることで物語が重層的に表現され、友達同士の心の行き違いが切なく語られている。
- エ「頬がかあつと熱くなった」「胸の奥がじん、とあたたかくなる」など感覚に訴える表現が効果的に用いられ、不安定に揺れる中学生の心の動きをたどることによって、現在の中

学生が抱える問題が浮き彫りになっている。

エ 長所を認めてくれたことに加え、そのおかげで手紙の主に励ましの言葉を送る勇気を与えてくれた「琴穂」に感謝している。

問七

——線X・Y・Z「めんね」とありますが、これらについての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア Xは「みなみ」や「マチ」の「紙音」に対する気づかいを知りながら自分の都合で一緒に行動できなかったことへの謝罪の気持ちである。Yには合唱のリーダーでありながら、「マチ」にまかせて自分はきちんと取り組まなかったことに対する後悔の気持ちが含まれている。Zには何気なく言っていた言葉が、実は相手を傷つけていたことに対する反省の気持ちが込められている。

イ Xは今まで自己中心的な都合で周りに迷惑をかけながらそれに気がつかなかったことへの謝罪の気持ちである。Yには「みなみ」のことを思うあまり、つい言いすぎてしまい、「マチ」にもいやな思いをさせたことに対する謝罪の気持ちが含まれている。Zには嫉妬から「マチ」の陸上部入部を思いとどまらせようとしたことに対する後悔の気持ちが込められている。

ウ Xは「みなみ」や「マチ」の「紙音」に対する気づかいを知りながら自分の都合で一緒に行動できなかったことへの謝罪の気持ちである。Yには責任感の強い「みなみ」にばかり無理をさせていたのに、今日までそれに気づかなかったことに対する反省の気持ちが含まれている。Zにはいやがる言葉が無神経に繰り返すことで「マチ」を傷つけたことに対するお詫びの気持ちが込められている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本は自然災害の少ない国である。地震、台風、津波——私たちの祖先は、こうした自然災害に対して知恵をしばった。災害の予防と予知についてである。

まず、予防だが、地震については家屋の建築法である。日本の家屋は、地震を覚悟のうえで造られたものと考えていい。要約していえば、建てた直後から揺れるように出来ているのだ。

日本の建築は、木材をつなぐのにほとんどクギを使わない。穴をあけてホゾを差し込み、叩き込んでつなぐ。骨格自体を柔構造に組み立てておいて、建物の上部に重心を置き、**I** 重い瓦をのせる。

年月が経って、木材が乾燥してしまうから、継ぎ目にゆるみが出来て、そのゆるみがエネルギーを分解吸収してしまう。だから、激しく揺れるが、容易には倒壊しないのである。

これは、**II** 地震の心配がない西洋のレンガ造りや、石造りの家屋と比較してみると、その構造の違いがよくわかるだろう。

※1 1章のはじめに、日本の城郭技術として石垣を、力学の見地から述べたが、石垣もまた、西洋のそれとはずいぶん違う。日本の石垣は、すき間をあけて築いてある。西洋のそれは、きれいにびっしりと築いてある。

これは日本の技術が幼稚で、野蛮だからではない。**III** 粗積みしであるのだ。これは地震とか風、波といった外部からの力に、どう対

応するか、という場合に、日本人と西洋人との間に発想の違いがあることを示している。

石垣を築く場合、西洋人はそれにかかる力をはね返すだけ強力なものを築く。自然の力を征服しようという自信があるからだろう。

日本人の場合、自然の力が人力を超えることをはじめから予測している。石垣を粗積みするのは水を抜くという利点もあるが、地震や波、風といった力が加わった場合に、それをはね返すことよりも、内部に吸収しながら、エネルギーを分散させることを考えるからである。

防風のための石垣は、四国の愛媛県に少しと、沖縄県にたくさんある。割石や珊瑚礁を割って、一見、無造作に積みあげてある。強い風が来た場合、風圧の七割近くが石垣の間に吸われてしまう。だが、防がなければならぬだけの風圧は、あれで十分防げるのだ。

日本の家屋が、もともと柔構造に造られているのと同じ発想である。これは西洋の合理精神に対して、日本の「非合理の合理精神」と呼ばれる知恵の典型である。備えあれば、憂いなしのたとえどおり、自然災害に対してもつとも有効な予防は、その災害を予知することである。予知していれば、被害を最小限に食い止めることができる。

今日でも、地震対策はⅣ困難なようだが、私たちの祖先はこれを地震エネルギーの分散といったサイエンスの力なしにやろうとした。だから、科学的とはいえないかもしれない。だが、今日にして思えば、科学的な根拠がまったくなかったともいえない。二、三の記録をあげてみよう。

丹後の地震というのがあった。昭和のはじめに、丹後の天橋立あたりにあった地震である。そのとき、そこに住んでいる漁師たちは、前日にこれを予知して、仕事を休み、舟を全部、引きあげておいたため

に、災害をまぬがれたという。これは新聞記事にもなった。

理由は、「浜がいつもより暖かった」というものである。地震は地下エネルギーの飽和点で起こるから、浜辺がいつもより暖かったとしても不思議ではない。

しかし、これはごく微妙な差であろう。その差を感じできるのは、日常からの観察のおかげだろう。自然に何か異常が起こるとき、自然の生き物たちは、何らかの形で、それを察知する。ヤマネズミは、地震の前には山から逃げ出す。ミミズも出てくる。これは、地熱、地磁気の異常と静電気を感知するからだろうといわれている。

今日、私たちは、この微妙な反応を示す自然の生き物を駆逐してしまったし、また、そうした第六感に近い観察能力も失ってしまったから、災害を予知する術もない。私たちの祖先は、科学こそ知らなかったが、その基礎になる自然観察の能力においては、私たちをはるかに凌駕していたといえよう。

これは伝説だが、江戸時代に、三河の国（愛知県）にある名医がいたという。このエピソードはいささか奇妙だが、ある日、地震を予知した彼は、丘の上に登って、藁を燃やして、寺の鐘を叩いた。

村人たちは何ごとだろうと、丘の上に集まった。その直後に津波が襲って、全村の家屋が水にさらわれたが、村人たちは助かった。今日でも、その村に碑が立っているそうだ。

彼が予知した根拠は、人間の脈だという。

彼は、人間の運命は自然と並行する、という自然哲学者で、その日に自分の脈をとって、三脈（左右の手と頸部）の異常を感じ、これを災害の前兆と信じたというのである。この伝説には、東洋の自然哲学観の誇張を感じるが、その真偽を問う前に、脈でわかったと

いう彼の日常の誠実な医者としての生き方と、そこに育った観察力があつたからこそ、このような話ができたと考えるべきだろう。

ネズミは火事を予知して、家から逃げ出すというが、日ごろネズミを観察していなければ、それを知ることができない。モグラは、洪水の前には穴から出て高い所に逃げるといふ。今日では、それはモグラが温度の微妙な差や、静電気によつて感知するのではないかといわれている。だから、洪水のあるなしにかかわらず、危険な状態になると逃げ出すわけである。穴の中で溺れたモグラとか、地震で押しつぶされたミミズという話は聞かない。溺れ、つぶされるのは人間だけである。

海の水位が急に下がる。毎日毎日、注意して海を見ている漁師にとつて、これは大変な異常事態である。山に木を伐りに行ったら、大量のモグラが移動している……。こういったことから、天変地異を予知した人々の例は枚挙にいとまがない。

ぬばたまの夜さり来れば巻向の

川音高しも嵐かも疾き

『万葉集』巻七にある柿本人麻呂の歌である。

巻向川（奈良県）のほとりに住む恋人を訪ねたとき、川の音が高いので、明日は嵐が来そうだから早く帰ろう。というような意味の歌である。古代人たちは、天気予報というものを持たない代わりに、自分で自然を観察していたのだ。

（樋口清之『梅干しと日本刀——日本人の知恵と独創の歴史』

祥伝社新書 復刻版より）

問一

ⅠⅣに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。）

- ア あまり
イ なかなか
ウ さらに
エ わざわざ

問二——線1「地震を覚悟のうで造られた」とありますが、ここからわかることとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いずれ地震のために壊れることを予想して、困難にも決してくじけない逞しい精神を宿し続けて来た、ということ。
- イ どんな強さの地震でも決して打ちくだかれない、しなやかな素材の選定の仕方を受け継いで来た、ということ。
- ウ 地震が発生するのは避けようがないことなので、その揺れを巧みにかわす建築法を受け継いで来た、ということ。
- エ 地震の起こり方やその前ぶれを経験的に知ること、それらを充分にしのげる建築法を開発し続けた、ということ。

問三——線2「きれいにびっしりと築いてある」とありますが、何のためにこのようにしたのですか。わかりやすく説明しなさい。ただし、根本にある考え方に触れること。

- 問四——線3「非合理の合理精神」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 幼稚で野蛮だと批判される要素を多々持ちながらも、中心には西洋に優る論理が備わった論として通用するもの。
 - イ 西洋人の科学的な判断とは異なっているように見えるが、理にかなう考え方として受け入れられて来たもの。
 - ウ 確かな因果を持つ考え方ではないながらも、とりあえずは問題解決能力を備えた案として意味を持つもの。

エ 高度な科学的判断と比べて見劣りのする面があっても、ほぼ同様の効果が期待できる理論だと言えるもの。

問五——線4「村人たち」助かった」とありますが、この具体的な例からどのようなことがわかりますか。その内容を示す一文を文中から三十文字以内でさがし、最初と最後の五字を抜き出ささい。(ただし、句読点等も一字に数えます。)

問六——線5「溺れ、つぶされるのは人間だけである」とありますが、筆者がこのように述べる理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現代人は自然の生き物たちを身近に感じる経験をすっかりなくし、彼らの行動を知らないばかりかそれらを研究しようとする姿勢さえ持っていないから。
- イ 今日我々は科学の進歩発展により快適な生活を実現したため、本来備わっているはずの自然と寄り添いながら発揮する察知力を失ってしまったから。
- ウ 今日の我々は自然と共存したり全身体的に自然と関わっていかうとしていたりしていない上に、細やかな観察力を失うような生き方をしてしまったから。
- エ 現代人は常に人工的な刺激で身の回りを満たしており、もはや自然の中であって自らをコントロールすることもなく自然との距離を広げていくばかりだから。

問七——線6「万葉集」巻七にある柿本人麻呂の歌」とありますが、筆者の考えに基づいたこの和歌の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 古代の人々も、夜が過ぎ去ったという時間の流れを意識してやがて襲って来る災害に備えたということがあったようで、それは「夜さりくれば」という表現から判断できる。
- イ 万葉集の時代の人も、いつもとは異なる川の音に気づいてその後の天候の大きな変化を察知するということがあったようで、それは「川音高し」という言葉から判断できる。
- ウ 万葉集の時代の人々も、日頃とは違った落ち着かない思いから翌日は嵐かも知れないと身構えて行動することがあったようで、それは「嵐かも」という言葉から判断できる。
- エ 古代の人々も、雲の動きを観察して間もなく疾風が吹き荒れることを予測し素早く行動しようとするものがあつたように、それは「疾く(早く)」という表現から判断できる。

問八 本文について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の力を充分にわきまえた上でそれらと巧みに折り合いをつけて来たことから、日本人の知恵が有効なものとして世界の注目を集めている。
- イ どんなに科学文明が進行しても、生活に密着し受け継がれて来た素朴な古代人の知恵を無視しては、真の発展を実現したと言ふことはできない。
- ウ 災害が多ければ多いほど人間はそれに負けまいと創意工夫を重ねるものであり、それは日本人らしさ、西洋人らしさを産み出すものとなった。
- エ 古人の知恵を参考にしつつ、西洋的合理精神を第一としないう、自然の変化に寄り添った創意工夫のある生き方を探り続けることを忘れてはならない。

【国語】

解答用紙(中学第一回)

受験番号

氏名

得点

一
1
2
3
4
5

二
問一

問二
問三
問四
問五
問六
問七
問八

三
問一
I
II
III
IV

問二

問三

問四

問五

問六
問七
問八